
魔法少女リリカルなのはって何？

平民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはって何？

【Zコード】

Z7367Z

【作者名】

平民

【あらすじ】

この世から死んでいった主人公の前に現れたのは神と名乗るもので転生させてくれるという。主人公は原作知識もないまま、生きていけるのか？

注意 現実にある団体や場所などとは関係がありません。

さらにこれは作者の妄想の垂れ流しです。処女作ですので駄文です。

注意点（前書き）

何故書いたんだろうか . . .

注意点

この作品を読むにあたっての注意点

作者は厨二病でありそれが嫌な方は戻るなり、ブラウザを閉じてください

この作品は魔法少女リリカルなのはとあります。が作者は最近見たばかりなので更新はかなり遅いです

原作が崩壊する可能性があります。それらが嫌な方も戻るなりブラウザを閉じてください

ご都合主義、主人公最強が嫌な方も戻るなり、ブラウザを閉じてください

作者はこれが始めてなので改善点などを教えてくれるとありがたいです（これは別にかまいません）

以上の注意点を確認し、作者の妄想を受け入れられる方のみ進んでください

注意点（後書き）

反省も後悔もしている。

プロローグ（前書き）

駄文で拙い文ですがどうぞ

プロローグ

なぜ、ここにいるんだろう。なぜ、田の前に頭が光輝いて髪が異常なほど長いおっさんがいるんだろう
おかしい、何かがおかしい俺は確かに死んだはずなのに生きている気がする。とりあえず死んだのか思い出してみよう・・・・・

「ここせどいかの病院だっけ？ たしか原因不明の病気だっただかな？」

「はあ、暇だ」

そう呟く、入院なんて退屈なだけだろうにじる飯はあまりおいしくないし、ああ鬱になる。そう思いつつパソコンをつける何故かパソコンは使ってもいいらしい病院なのに・・・・・とりあえずお気に入りのファンフィクション小説を見る

「いいなあ。色々なチートや転生ボーナスもらえて。」

そういう、更新されている物の続きを見る。ここにのを見ているところ、胸が熱くなるというよりもなぜ、ここまで平和な日々を送ってきたのに簡単に能力を把握して簡単に戦えるのか思ひ。まあ、現実じゃないからあまり気にしないほうがいいと思ひ。

このような毎日をもう何年、何十年と繰り返している。元気なときと比べるとただベットにいるか、いないかぐらいしか変わらないと思う。今頃元気だつたら中学三年で受験勉強かな？そう思うと嫌になってくる。ああ本気で鬱になりそうだ、いややる気が起きないの方が正しいのか？不意に外を見ると夕焼けが病院の周りにある木と重なつて綺麗に見えた。味気のない病院の夕食を食べつつパソコンの某動画サイトを見る。もちろんアニメだ。夕食を食べ終わり動画の続きを見る。

眠くなってきた。時計を見る、もう消灯時間だ。パソコンを消し、掛け布団をかぶりそして目をつぶる

電気が暗くなる、消灯時間が来たようだ俺はいつまでこの毎日が単調で、平凡であり、平和な変わらない無限ループの中でいつまでこのままいけばいいのだろうか？だんだんと眠くなってきた。このまま明日も変わらない毎日が来るのか・・・そう思いため息をつく。ああ幸せが逃げていく。もう考えるのはやめよ。俺は鬱になりかけのまま暗い意識の中に落ちていった

そう、俺がいつまでも続していく平凡で、平和な、単調な作業をこなしていくだけの無限ループの日々が終わるとも知らずに・・・

プロローグ（後書き）

パソコンはもちろんノートパソコンであり病院の設定は自分の勝手な想像です

プロローグ 突然の終わり（前書き）

原作はまだ入りません。なぜならまだまとまっていないから。

プロローグ 突然の終わり

そう、突然だつたのだ。急に目が覚めて気分が悪くなつてくる。苦しい、苦しい息ができない。

落ち着け、落ち着くんだ。よくあるだろつ冷静になれ。よくあると いうのはたまに気分が悪くなるのだ

しかし、今までのとは比にならないくらい苦しくなつた。俺は必死 にナースコールを押そうとした。しかし・・・押せなかつたいや腕 が痺れて動かないのだ。それは、自分のものなのに自分ものじゃな いように感じた。

やばい、やばい。これってよくいう詰んだといつづつ状況なのか？ そう、なぜか冷静なまま思つた。

でも…これだけは思うく死にたくないゝそうだ、死にたくないのだ。俺はまだ14という若いまま死にたくないのだ両親の半分以下、弟 の半分以上で・・・

だけど、俺はどこかであきらめていたのかもしれない生きるとい うことをそつ思つと最後の足掻きだ俺は思い切り腕を上げようとした が痛い、痛すぎる声をあげようとしても空気のヒュー・ヒューとい う音しか鳴らない

ああ、やつぱりだめかそう思い意識が闇に落ちていった

結果的には助かつたのだ。俺は自分が生きている中で一番つれしか

つたことに違いない

親と医者の声が聞こえる

「どうあれ、まあ大丈夫でしょう。」

いやいや、まあなんだよ。まあ。

「おじがどうぞ。」

やつ、親の声が聞こえる

「後遺症もあつませんし。」のまいけば助かるでしょう。」

ああ、助かるのか俺はやつ思い、意識を闇の中に落としていた。

なぜ、ここにいるんだろう。俺は助かったはずじゃなかつたのか？
すべてを思い出し終わり田の前にいるおっさんみたいなおじいさんが俺の心を見透かしたよひよひ

「お前は死んだのだよ。」

そう俺に向かって言った。

プロローグ 突然の終わり（後書き）

よくある転生者ですね。テンプレかもしませんけど・・・

プロローグ 死んだ先の行方（前書き）

テンションがあがり、宿題も手につかない。しかし俺は今年には終わらせる！
たぶん：

プロローグ 死んだ先の行方

「お前は死んだのだよ。」

目の前にいるおつせん?にいつひまつひ

「じこばざこなんだ?俺はなぜここにいるのか?」

「一つ目の質問の答えは、じこはお前たちで言つ死んだ先の世界。簡単に言つと天国や地獄だ。一つ目はお前が死んだからだ。一つ目で言つた通り死んだ先の世界にいるのだから当たり前だろ?」

俺は理解できなかつた。なぜ?助かつたんぢやないか?そう思つと異常に苛立つてきた。

「そう怒るなよ。死んだものは仕方がないことで願えば帰れるのか?割り切れよ。お前はよく割り切つてきただろ?」

違う、俺は割り切つていない。諦めていたのだ。突然の原因不明の病氣にかかり諦めていたのだ。

ここに来た時に死んだはずなのにと思つたのもどこかで諦めていたかもしけないからだ。

よく見る小説の設定のようなところにいたからである。たしか、転生者の物だつた気がする

「なあ、そう落ち込むなつてこつちも仕方がないんだよ。お前が思つてゐる転生物の書類が~とか、失敗して~とかじやないからな。」

落ち込む?そんな顔をしているのか?

「ああ、じてこる。」の声の中が信じられないって顔をしてこるよ。

「

「俺は……どうなるんだ。」

「「」のまま消えるか?…とにかくも、消すんだが。」

嫌だ、嫌だ、死にたくない。その前に親に謝らないといけない。お礼をしたい。

「嫌だ。俺は消えたくない。俺は死にたくない!」

「やつが…よく言った!」

「は?」

反射的に疑問が口に出していた

「「」から俺の管理じゃないからな。ひょっと待つて、親父を呼んでくる。」

え? 親父? オヤジ? 親父って父だよな? 英語で father だつけ? とりあえず、田の前にいたおっさん? の父が出てくるのか? 疑問や謎を残したままこの場で考えていたら

「何じゃよ。今アニメで感動の所なんじゃよ~最終回なんじゃよ~」

「つむせえよ。親父がポンポン書類を適当に押すから謹慎食らつたんだろ?」

「うわせたとは何事じやー最終回で感動の場面つやよへんじとめられた者の怒りを思い知れー。」

「あほか。今は神通力は使えないだらつ。」

「ふつ。あまいわーべー」「おー。放心してーんべー。」

「ああ、やうじやな。」

そう聞こえたとき俺はどんな顔をしたんだらつか?

プロローグ 死んだ先の行方（後書き）

トントン拍子で進めて行きたいです

プロローグ これから準備（前書き）

Q こんなに飛ばして大丈夫なのか？

A 無理だと思います。

プロローグ これから準備

とつあえず現状を確認だ。

俺知らないといひにいる なぜこいつなったか思い出す オッサン?
登場なんか消すとか 消えたくないといつ 親父を呼びに行く
アニメのことで怒るおじこさん登場だな。

とつあえず俺はどうなるのか不安になつててきた。

「ふむ、でなんじやこの供は?」

「消やひとつ思つたら消えたくないんだよ。」

「やうが、でなぜ消わない?」

「面白そつだから。」

あれ?俺つて面白いのか?ただ理不尽な死を受け入れたくないから
消えたくないと言つた訳で

「で、お主は死にたくないのか?」

「ああ。」

「それがつらことひとでもか?」

「どものよつてつらことのか教えてもらいたいのだが?」

「なぜ敬語じやないんじや?神様じやよ?最高神じやよ?「テンプ
レですね。」話の途中でしゃべるな!「すいません」これだから最

近の若い者は・・・

なんかぶつぶつ言つてるけれど大丈夫なのか?

「親父、俺まだ仕事残つてるから後よろしく。」

そういう最初にいたお父さん?は消えた。やはり、ここの俺の知つてこるところじゃない

「わひと、お主を転生させるがどうがいい?」

「え? これって俺が決めるの?」

「まあやうじしたいのじゃが、わしは最高神じゃからひとつおきの世界に転生させてやろ。」

「ありがとウザギこます?」

「なぜ疑問なんじゃ? まあ、聞いて驚け! その名もく魔法少女リリカルなのは! じゃ!。」

「魔法少女リリカルなのは? それって何?」

疑問に思つたのでそう返すと最高神が

「な、知らないといふのか! あのすばらしいアニメを……」

なんか落ち込んでいるけどもつ動じないありえないことなんてないのだから

「まあ、その世界に行くためのボーナスのよつなチートをやれりつー。」

「なんでもいいのか?」

「わしを誰だと思っている最高神じゅよ?最高の神じゅよ?そんな
わしに不可能なんでない!」

なんか力説していなんだが疑問を述べる

「何個でもいいのか?」

「ああわしは最高信者からな。その前にたくさん書類失敗してたく
さん願いを叶えてやつたからな!」

「たくさんひでどのくらひ?」

「ああ?わしは数十人じゅつたよ?」

「やばい、」の最高神は書類を数十人分失敗して殺したといふことだ
よな?」

「ああ、ちゃんと土下座して能力をやるといつたら狂つたよ?」
んで色々能力を・・・って聞いてる?」

「土下座ですむものなの?」

「ああ、許してくれるか聞いたらす」「いい笑顔で許してくれたん
じゅよ。」

「どんな人が来たのかおしえてくれませんか?」

「ああ？みんなその世界に絶望したり諦めていたからなあ。よく覚えておらん。」

「で、その世界に行くためのボーナスはこへうでもこことへ.

「わからん。で、何を望むんじや。」

「やう、だな。まず動物と会話ができるよつ。あと足を早くしてく
れ。生活に困らなつてお金をくれ。あとは・・・・ないかな
「なんじや？その夢のないものね？もつとね、強くーかぎりなく強
くーとかーコボとナーテボとかフラグを簡単に立てれるよつことかイ
ケメンにとかないのか？」

「最高神さん、別にいいんです。最強になりたいわけじやないし。」

「じやが心の奥では願つてこると思つたじやが？」

「なら、それなら大切なものを守れる力をください。」

「わかった それでいいんじやな？」

「いや、まだです。向ひつの世界にこつても願いをかなえさせてく
ださい」

「これは保険だ。向ひつて何が起つるかわからなつ

「ア解じや。」

プロローグ これから準備（後書き）

会話が長くなりました
作者も魔法少女リリカルなのははよく知りません
変なところで切ってしまいすみません

プロローグ セリナの準備（前書き）

まだ続くプロローグといつも時間稼ぎ

プロローグ わりなる準備

「了解じゃ。」

「そつ最高神が言つと田の前が光り輝いて……なんてことは起きなかつた。少しがつかりだ

「なんじや？ その不満そつな顔は？ まあいいじゃらつその前にこれから転生するための世界は知つてこるか？」

「魔法少女リリカルなのはといつ世界だらつ、だがしかし、俺はそんなんアニメは知らないぞ？」

「せうか……なじま」のわしがお前にどれだけすばらしいのか教えてやるつ……」

「そつこいかなりあつて語り始めた……唾が飛んでくる。はあ鬱だ

～30分ぐらいい経過～

「～どあるからしてとても…すゝく…熱い…アニメなんじや…」

～1時間ぐらいい経過～

「わらに感動もできる…とでもよこアニメなんじや…」

～2時間ぐらいい経過

「で…そんな…とてもすばらし…わしの…大好きな…世界に…転生させてあげる訳なんじやああああああああああ…」

とても長い原作と関係ない」のアニメの世界がすばらしいか延々と聞かされた…まあ、ほぼ聞き流したのだが…

「でも結局どんな世界なんだ？」

「簡単に言つと魔法が使えるようになる！かも知れない世界じゃよ？」

「なぜ疑問なんだよ。」

「や」は努力しだいとこ「」とぞ。」

その後、少し原作について教えてもらいました。ストレージ？やイントリジョント？コニゾン？などのデバイスという物を使うことなどを知りましたがよく分からないので、デバイスって何だよ。みたいな感じです

「で、欲しくならないか？デバイスを？欲？「別にいりませんよ。」なんじやと…どれぐらいす「」のかわつかたじやろ？いまなら好きなデバイスで名前も付けられてバリアジャケットのデザインも考えられるんじやよ？そんなお得な機会なんてないんじやよ？」

「別に最強をを目指している訳じやないし別にいらないと思いますよ？」

「甘い、それは正論じやがとても甘い考えじやよ。これから行く世界は死亡フラグがあるんじやよ、そんな危険から守るために一家に一台のデバイス…じつじや？欲しくなつたじやりつ…」

なぜそんな通販みたいな言い方なのか分からぬがいるもののは
いらないそう思う

「まあそこまで断るならいいじゃね?」(お前の病院生活で考えて
いた痛い妄想をつめこんでやるわ!そして勝手に送つてやる...)「

なぜか寒気がした。」(背中に虫が這いずり回るような生命の危機
に似た何かを感じた

「まあそこまで断るのは初めてじゃしな。他の転生者はやはり狂喜
乱舞しておつたのに...」

それは、原作を知りどうすればいいか知つていてるからでは?いやそ
の前に“他の転生者”と言つたか?

「なあ最高神さん他の転生者って何人いるんだ?」

「まあざつと、わしの書類ミスで数十人...約40人くらいで他の所
からくるのをあわせると数百人は超えるんじゃないかのう?」

その言葉を聞いたとき戦慄した。まずこの神の他に神がたくさんい
て、しかもそれらの神が書類ミスなどでも無意味に死んでいるのか
?その前にポンポンと書類ミスなどで死んでも大丈夫なのか?

「何を考えているか大体分かるんじゃが書類ミスなんて夜にやらせ
るからミスをするんじゃ!もつと自由時間を一週休五日!これぐら
いくれてもいいと思うんじゃよ。」

「いや、あなた最高神でしょ!それが休んでどうするんですか?」

「べつに、わしはもう人間でいつ定年だしておじいちゃんだして
とてもよくできる息子もいるし、わしは…そつ…息子に最高神をゆ
ずつて引退したいんじやああああ…」

「そんな最高神で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない（キリッ）」

うわあ決め顔？…と言うのか？…とても気分が悪くなるような笑顔でサ
ムズアップとかありえない

「ネタはおいといつだつたらなぜゆづらんいんだ？」

「まだあいつは頭が固いからの、…」

「す」…遠い目をしているんだが…まあ確かに固そうだつたしな

「とまあ〔冗談は〕ここまでにして行こうつかの、」

そういうと最高神がまとうオーラ？みたいのを感じた

「汝は前世で幸せな顔をして死んでいった！なのに…まだ死にたく
ないと申すか…」

「はい…」

返事に自然と力が入る

「ならば汝を転生させてやろう！…行き先は転生者が数多くいる…く
魔法少女リリカルなのは」の世界に連れて行ってやろう…」

ああ、長かった、とても長かったといつあえず来世にまつかるよつだ。
そつ細つと

田の前に

すゞく息切れをしていて今にも死にそうな最高神が地面に倒れていた

「わし、今、力を使えないんじやつた」

おこ今までの感動を返してくれよ

プロローグ わがなる準備（後書き）

しつこじょうですが作者は原作の設定などを知りません。
さらにまだぐだぐだ続けていき原作に行くまで時間がかかると思います。

後、なぜ時間がぐらいなのかは時計がないからです

プロローグ といつねの補足と時間稼ぎ（前書き）

プロローグがこんなに長いなんて原作にいつになつたらいけるものか

プロローグ とこづかの神足と時間稼ぎ

前回のあらすじ

最高神（笑）が自分のマスクに隠れました

「なあ、わつとお最高神（笑）とか思つたじやねん。」

やべ顔に出でたか？

「こや心を読んだのじやよ。心をな。」

なんか初めて最高神と思つた

「なぜ初めてなんじや…ちくしょおおおー！ゲホッゲホッ」

「無駄に叫ぶからむせむだよ。」

「まあ安心するんじやな。いまわしの力を一時的に解放してくれる
みづ頼んでおいたから」

あれ？こつが最高しこ「最高神よつ上がりのじやよ…」

「わしの上にも神がいるんじやよ。確か世界の管理者とかにわれて
こむのひ。」

じやあ力関係はこんな感じか？

世界の管理者へ最高神へへへ最高神の息子へ田の前にいる最高神へ
へへへへへ（越えられない壁）へへへへへへへ一般の神

「まあそんな感じじゃの。それとお前が行く世界は平行世界、パラレルワールドといふことじやなそれだから好きなように原作に介入したり原作ブレイクしていいんじやよ。それに、お前より先に行つたやつと同じような年齢になつておるから安心せい。」

よかつたこれで遅いから相手に攻撃されても逃げれる

「じゃがそれぞれの意志で年齢を変更してからこつたやつもいるんじやよ。」

「あ、やっぱこれって詰んだとか死亡フラグといつもなんじや…

「安心せい。よほど目立たない限り見つかる可能性は少ないじやうう…多分」

「おこ、多分つて何だよ多分つて、それつて見つかったら即ゲームオーバーじゃねえかよ。」

「そのためにわざわざいくてバイスがいるか聞いたのこ。」

「先に行つてくれよ。」

「お主は原作介入するつもりはないんじやから安心すればいい。」

そうだつた。俺は介入する気なんてないんだから…だがもし、ものことが合つたら？俺が思う言葉にこうある“ポジティブに行動し、ネガティブに考える”とつまり樂観的に行動しながらも、悲観的に物事を考えろということだ。ピンチになつたら逃げればいいそういう思い考えるのをやめた

（数時間後）

「なあほんとに原作介入して原作ブレイクしないの？」

「じつじつ。」

「なあお願いじゃよ、失礼します。」

「何じゃよ。今説得しているのに。」

「力を一時的に使つてもいいと許可が下りました。」

「分かった。下がつてよいぞ。」

「失礼します。」

部下の人？なのかとりあえずこの神から開放されるといつづれしくなつてきた

「なんじゃよその嬉しそうの顔は。まあこれでお前も転生できるありがたく思ふ。」

やつた転生であるけれど前世でできなかつた事ができるー。

「わあこいつに来るんじゃよ。転生させるか？。」

そして俺は最高神の面つとめを行つた

「じゃあ転生させるが。」

「はい。失敗はしないでくださいね。」

「分かつておるでは行くが……」

最高神がそうこうと体に何かが来る

「ああ転生するんじゃー！場所はく魔法少女リリカルなのはの世界ー！」

「ああ言ひ忘れておつた。テンプレと言わたからもうひん赤子のときから意識はあるからな。せいぜい黒歴史を作るがいい。ああ、ああ、氣味が悪いと言られて捨てられることはないからな。」

最後に最高神はこういい俺を転生させた。最後にいうないテンプレとこうかの最悪のものを残して

プロローグ といづかの補足と時間稼ぎ（後書き）

やつと先に進めやつですね

第一話 始まつた新しき命

目を開けるとそこには知らない天ゞよ「ほら、見て目を開けたわよ。
「はい？ だれだらうか、知らない女の人と男の人があ目の前にいるの
だが

「本当か！ ああ、かわいいな！ 流石私とお前の息子だな！」

このテンションの高い人がお父さんになるのか、というよりも前世
の父と同じ顔とは一体？

「ちょっとさういふとこわよ。」

「はい・・・・すみません。」

あ、お母さんも前世の母と同じだな。だが両親が同じだと前世とあ

まり変わらないような気が・・・

なんか眠くなつてきた。そう思い目を閉じて眠りに着いた。

流石にあれは恥ずかしい。なぜなら赤子になつてるので何もでき
ないからだ。恥ずかしい思いをあんなにするなんて思わなかつた。
オムツを替えられるときが一番つらかつた。だつて鼻で笑うんだよ
？ 俺のナニを見て笑うんだよ？ あれはとてつもない苦痛だつた。泣
きたくなつたがそこは必死にこらえて耐えたよ？ 泣きそなうのを必
死に耐えたんだよ？

ああ、血分の姉前は前世と回じでしたね。両親も丸々回じでしたね。ついでに畠つと家もおじいちゃんも、おばあちゃんも回じだった。ここまで回じだと軽い今までのことは全部夢で最高神も全部夢だったのか？錯覚を覚えるぐらに不思議に思つた。しかし、今までのものは全部現実であり、前世もその記憶も大切なものなのだ。だからあの記憶や思い出を“夢”と言ひ言葉で終わらせたくないのだ。とつあえずこんなことを考える1歳児なんていいるのか？と思つ。離乳食はおいしくなかつた。病院食を思い出して泣きそうになつた。夜泣きなんてしてないし比較的おかしいほつに入るのだが両親は

「この子、夜泣きしないのよ？とても強い子だと思わない？」

「やうだな。もしかして前世の記憶かなんかあるんじゃないかな？」

「そんな訳あるわけないじゃない。」

「やうだよな。」

父よ何故そんなに鋭いんだ？母よ俺は強くない。ただ声を出さないよつて隠れて泣いているだけだ。

こんな感じで1歳児の毎日は過ぎてこつた。

第一話 始まった新しき命（後書き）

短いのは自分が長く書けないからです。文才が欲しい。

第一話 七五三で見た転生者（前書き）

原作に行きたくても行けない

第一話 七五三見た転生者

はい、今私は七五三のために神社に来ています。何故自分のことを私が言っているのかと言つと俺と言つよりも私の方がしつくづくるからだ。だつて、三歳の子が“俺”なんていうと他の転生者にばれると思ったからだ。そんなことを考えていると

「ほら、千歳飴だぞ。」

そう言われ千歳飴をもらつ。前世だとこれが一番の楽しみだつたなあ。着物とか、きつくて動きにくいし、何故神社までくるんだよ、とか思つてたし。千歳飴のためだけに神社に来るといつても過言ではないと思つ。前世でも弟の千歳飴をもらつて食べていたし。

そんなことを思つていると明らかに場違いなやつがいた。だつてさ金髪で両田の色が違うオッドアイ?といわれる田をした子供だよ?おまけにイケメンだしさ、親もいかにも金を持つている感じでさ、両親ともイケメンと美人とかどれだけ願えばああなるんだ?とか思つているとその親子たちの声が聞こえてきた。

「ねえ、おなががすいた早くご飯食べたい。」

「ちょっと待つてくれよ。ラルフ。」

なるほど。あの明らかに場から浮いておりそれでいて血口を中心そつで、自分はすごいやつと思つていそうなやつはラルフとこうのか。もしも本当に転生者だつたらどうしようか?

「ん?どうした?」

「えつ、なんでもないよ。きこしないで。」

「ああ、そつかならしいんだが。」

危ない危ない、どうやら考え方をしていたらしい。と同時にいつも両親はあの親子をみて何も感じないのか?聞いてみよう

「あの子つてすごくない?」

「ん?あの金髪の子か?別に何も感じないぞ?といつよりも俺はお前が一番だよ。」

とつい、父は私を抱き上げてこうと言つてくれた。そのことがとても嬉しいと思つた。

“私”は“俺”であり“俺”は“私”であるのだ。つまり俺といつ前の世界の人でもあり、私といつこの世界にいる“ごく”普通の一般人なのだ。そう思つと泣きたくなつてきた。確かに俺は前の世界のことを忘れられないが今はこの世界の生きる人なのだ。

／ラルフSide／

「ねえ、おなががすいた早く」飯食べたい。」

「ちよつと待つてくれよ。ラルフ。」

そう会話をする。何故こうなったのか俺は知っている。そしてこの世界のことも。何故こうなったのか思い出してみよう。

俺は死んだのだ。何でも、神が書類ミスをしたんだとよ。なんてお約束なんだと思っていたがこの際動でもいい、なぜならばこのまま行けば神が出てきて・・・・・

「スマスマセンドシタ。」

なぜかそういって下座をする。神といつ者か地に座り謝つてくれる。

「ついつい、うつかりミスをしてしまったのじゃ。じゃからこのことを上の者にばれないように」他の世界に転生させてくれるんだろう?「ううじやー!話が早くて助かるの?。ん?どうかしたのか?」

まじかよ。本当に転生できるのか。やっぱ嬉しい!笑いがこみ上げてくるーよしーこうなつたら転生特典をもらつて楽しくくらしてやるぜー!

「で、転生させるための世界なんじゃがく魔法少女リリカルなのはへの世界でいいか?」

「ああ、別にかまわない。」

「マジかよ。あのアニメかよー」これは嬉しい誤算と言つやつか？

「そしてその世界に何もなしで送るだなんて、最高神としての名が許さないんじゃー」と言つ詫で何でも好きなのを言つてみよー」

「そうだな。まずはすげーイケメンにしてくれー。もちろん金髪のオッドアイでー。あとはニコボ、ナデボ、最初から最高の能力値でお願いします。ついでに両親もイケメンと美人でー。」

「分かった。最高神にできぬことなぞないー。」

そういわれると俺の体が変わつていぐ。俺のこの自分でも嫌だった容姿が変わっていく。

「よし、では幸運を祈るぞ。デバイスは転生する世界で誕生日にちらえるからなー。」

「そういわれた俺は光の中に消えていった。とても楽しみだなあ よしー原作ブレイクしてやるぜー。」

↓ side out ↓

「その後の最高神」

「楽しみじゃの～うあやつ以外にもたくさん転生者がいるというのに・・・・まあ詳しいことを聞かないあやつがわるいんじゃから仕方ないのう。さてと、アニメの続きでもみようかのう。あやつで何十人じやつたかのう。まあ、後で息子に聞いてみるか。」

第一話 七五三で見た転生者（後書き）

他の転生者ができましたがこれから出でてくるとは限りません。ついでに言つと転生者は基本イケメンやらかっこよくだと願つているので簡単に見つけることができると思います。

第三話 ハレゼント～（繪書モ）

これをや。書いていいとモクリスマスなんだぜ？

第三話 プレゼント？

七五三から口が過ぎて、クリスマスです。せっぱりクリスマスは楽しくやらないとね！ヒヤッホー！すみません。興奮しそぎたようですね。さらに今自分が分からないんです。

前に『“私”は“俺”であり“俺”は“私”』なんて事を言つたせいで余計に自分が誰だか・・・・まあ、それは置いてクリスマスは子供ならテンションが上がるものー！馳走にプレゼントにケーキ！考えただけでテンションがあがるぜ！

「わひと、食べるかー！」

「「「いただきます。」「」」

父の言葉で「馳走を食べる。

うん。おこしごとこいつもやつぱり前世とほぼ同じ味だとか・・・・・

じじが本当に転生した後の世界なのか分からなくなります。前世と同じ両親や親戚、同じ家、同じ味、違うことだなんてじじが海鳴市とこ「ハジベラ」かな？

「どうした？食べないのか？」

「食べるよ。」

「やつか。」

」の「」の考えすぎて、両親（特に父）」のようになに言われる。母があり喋らなくなつたがただ仕事が忙しいだけなんだ。父が家で主夫をやり、母がバリバリのキャリアウーマンと言われるような仕事ぶりなのだ。

「いじめられません。」

そういう、洗面台まで歩いていく。三歳だと自分で歯を磨くよ？恥ずかしい思いはあまりしたくないから。」のことを親は「もう自分でできるのか。すごいな。」や「いつの間に一人で・・・」なんて事を言つていたが過保護すぎではないか？と思つべからである。

とりあえず歯を磨き終わり、布団に入る。お風呂はもう入ったからいいや。やつと思つとすぐに布団のところまで行く。やべ、超眠い。だんだん・・・・・まぶ・・・たが・・・・・そう思つたとたん深い眠りについた。

「ん・・・・・ねみー・・・・・」

「」をこすりつつ洗面に行き顔を洗う。・・・・・よし、」が覚めた。とりあえず冬の水は冷たい。だから、すぐ」が覚める。とりあえず、リビングに行こうか。

クリスマスツリーの近くに、プレゼントらしきものがある。きれいに包装されてるよ。なんだろうか？しかしそれよりも隣にある手紙のよみなものがとても気になる。すこしく気になる。どれぐらい気になるのかと言つと、とても大好きな番組がひたすたに最終回までどんどん伸ばして先がとても気になるような感覚だ。とりあえずこつこつは両親のものではないだらう。そう思い手紙を見た。

拝啓

おひすわじじやよ最高神じよよ。そちらの世界ではクリスマスと呼ばれる祭りの最中なんじやろ？だからわしもプレゼントを贈ることにしたのじやよ。とてもお前ことつて嬉しいものじやうつ。じやかに、わしのことを讃めたたえてくれよーそれじや。そういうことなのでよひこへたのむ。

敬具

テレフォンカード（最高神様直通）をてにいれたぞ！

「・・・いやいらなしし・・・」

そう呟いた

第二話 プレゼンテーション（後書き）

これは例の向こうでも願いを叶えるところアイテムです

第四話 誕生日が轉生した日（前書き）

なよひとあつとばしてこをます。書きたいことが書けない

第四話 誕生日それは転生した日

テレカを手に入れた後、親からのプレゼントは炊飯器でした。なぜだ・・・・

とりあえず、テレカを使うために公衆電話へ、見た目3歳だが精神的なものは大人に近いはず。しかし、受話器に届かない。しかたないからおもいきり跳んだ、だが届かない。

なぜテレカなんだ！電話番号でもいいじゃないか！そう思いながらも悪戦苦闘しつつも必死に頑張る。そうだコードの部分をどうにかすればいいじゃんか・・・・・

「もしもし」

「なんじゃ、今いとこなんじゃよ。ラスボスだから早めに用件を言え。」

「なぜテレカなんだよ。」

「電話番号なんて、教えられるか！」

「じゃあなぜそこにつながるんだりつね。」

「最高神を甘く見るなよ。それくらい簡単なことじゃよ。」

「もうじやなくて、なぜテレカに電話番号が書いてあるのかが知りたいわけなんだが。」

「え？ だつてそれがないと電話つながらないじゃね？。」

「わざ電話番号なんて教えられるかーってこつてたじやないか。」

「じゃが、テレカを使わないと何がどうから安心なんじや。」

「だが、もし落としたり、なくしたりどうなんだ？」

「そんなことはない。なくしても貰つて貰へるだけ設てあるからな。」

「ええよそれ、で話は変わるんだが願いは何回まで貰ってくれるんだ？」

「まあ何回も貰えてるとつまらっこ……じゃなくて上の者にばれるから3回が一番可能じやな。じゃが、話すことは可能じやかり話したことや質問があるとせむかかることじやつ。」

「分かつた。3回までだな。じゃな。」

「いむ。」

受話器を置くと、ジーと音が鳴るとともにテレカが出てきた。とつて帰るか。親も心配するだつた。

誕生日が田中と4歳になつた。長かった。それはそれは長い田中だった。

「誕生日おめでとうーーー！」

「ありがとう！」

そういうケーキにある蠅蠅を吹き消す。うん、こいつやつてもこれは楽しい。

「プレゼントは何？」

「れだよ。はい。」

そう言い渡されたのは、料理道具一式（フライパン、包丁、まな板、鍋などそのほか色々）と料理のレシピが載っている本。「やいやい」これを貰つてもこれをどうすればいいのやら。何？これで料理でもしろと？一回も作ったことがないんだぞ？

「これで、お前も立派な主夫だ！」

why? 主夫…だと…まだ結婚もしてないし、夫でもないぞ? そして母よ笑つてないで助けてくれよ…

とまあ「こんな」というのがあつたがそれなりに楽しい一日だった。

第四話 誕生日それは転生した日（後書き）

短い…もつと書きたかったのに…

第五話 誰もが通る黒歴史 前編（前書き）

ほほ説明回

誕生日の次の日、田が覚めると「今日は……

じや顔でこる最高神がいた。ああ鬱だ……

「で何? 不法侵入で訴えるよ?」

「神じやから大丈夫じや。」

「神だからって向でもせもつてここと細つなよ。」

「最高の神じやから大丈夫なんじや。」

「上にそりて他の神がいるつまに息子よつもできないう前がか?」

「ぐぬぬ…まあお前に能力を渡しに来ただけじやから。」

「ああ、動物と会話できるよつよ。あと足を早くしてくれ。生活に困らなこよつにお金をくれ。だつけ?」

「ナウジヤ。やつと力が戻ってきたからな。」

「わうか。」

「「つむ、ではこべれ……ハツ」

「ん？ もう終わりか？」

「終わりじゃよ。あと追加でお前の思い出したくない痛い想像の能力もつけちゃったからな。」

「おい。追加の内容がひどいさるだろ。」

「まあこのためにお前に能力を渡さなかつたからな。後、デバイスに能力を入れようと思つたんじゃが入りきらなかつたんじゃが…」

「病院暇だつたからたくさん考えていたからな。仕方ない。」

「じゃが、かなり多くないか？ その前にじうしてそんなに冷静に対応できるんじゃ。もつと慌てればいいのに。」

「過ぎたことは仕方がない。だつてもう能力つけたんだろ？？」

「ああ。でもデバイスに入りきらなかつたからお前に古代遺産つまりロストロギアとして渡すこととしたから。」

「それって持つてるだけで犯罪とか捕まるとか言つてなかつたか。」

「大丈夫じゃよ。そこいら辺は抜かりがない。モーマンタイじゃ。」

「いや持つてるだけで犯罪臭するんだが。」

「お前以外のものが触れるとすると痛みが走るようにしてあるからの。」

「わーお。それなんてご都合主義だよ。」

「神にぬかりなし！」

「で、何をくれるんだよ。」

「まあとで。誕生日プレゼントじゃからな。ここで渡すと危ないから一回お前も上に行くが。」

「おこ。上りでどうだよ。」

「お前も書いたことがあるじゃね？ では逝くが。」

「おこ行くって字が違つが…」

「で着いたぞ。」

「おこなんで姿が死ぬときと回りになつてこるんだ？」

「（）天界じゃから、簡単に書いたとわしのプライベートルームじゃよ。」

「もしかしなくても俺死んだ？」

「仮死状態じゃな。じゃからわざと渡すから。まずはこの太刀と小太刀、それと木刀じゃな。」

「的確に俺の痛い妄想の産物を出すんだじゃねえよ。」

「まあ仕方ないじゃん。これがロストロギアに固定されると困つかう。あと希少能力もつけておいたから。」

「だんだん最強設定になつてゐる氣がするんだが…」

「でも、そつしないとほかの最強設定の転生者に対抗できないんじやが。」

「なら仕方がない。痛いのもつらいのも嫌だからな。」

「じゃが、能力だけに頼るのはいかんから、今からわしの息子と戦つてもううからな。せいぜい頑張るんじやな。」

死亡フラグが立つた。そつ思つたのはこれで何回目だろ？

話が長くなつてた。

主人公紹介と人物紹介（前書き）

そういうえば名前とか書いてなかつた。名前が出るのはまだ先になる
と思います

主人公紹介と人物紹介

主人公

名前 現時点では不明

見た目 黒い髪で普通の顔。簡単に言うと印象に残りにくい。

武器 太刀 小太刀 木刀

性格 ヘタレ チキン ビビリ とだめなものが詰まっている

父 見た目 どこにでもいる人

説明 結婚しても働く人。前世の方はサラリーマン

母 見た目 普通の人

説明 結婚しても働く人。前世の方は主婦

ラルフ

見た目 金髪で右目が赤 左目が銀 イケメン

説明 最高神の書類ミスで死んでしまった人。イケメンにして、金髪のオッドアイ、ニコポ、ナデポ、最初から最高の能力値を最高神に願った。なぜ黒髪の両親から金髪が生まれてくるのか不明

ラルフの父と母

見た目 父は黒い髪で威厳のある顔でしかもイケメン 母は長い髪で美人

最高神

説明 すごいアニメやゲーム好き。おじいちゃんのような見た目。最高神なのに地位は最高神の中でも一番下で息子に抜かされている。なぜ、息子に最高神の座を渡さないのかというと、アニメやゲームを買うための収入源がなくなるから。

最高神の息子

説明 恐い人でも、優しい人。気まぐれ。とても強い、どれぐらい強いかというと初期から能力が強くゲームだったらレベル1でもクリアできるくらい。

世界の管理者

説明 最高神より上の存在。女人らしい

主人公紹介と人物紹介（後書き）

主人公設定は出てきたら追加かあとがきで簡単に説明します。

第六話 誰もが通る黒歴史 後編（前書き）

もう大晦日とか。時間が早く過ぎる気がする

第六話 誰もが通る黒歴史 後編

あらすじのようなもの立つた！死亡フラグが立つた！でも死んでるんですけどね。

「なんじゅーのあらすじは。」

「心の心境です。」

「まあ死なない程度にがんばりなされ。」

「他人事だな。」

「他人じやからな。」

「で、俺は誰と戦えと？」

「ああ、この前転生したやつじやよ。」

「あの子供か。だが戦えるのかよ。一度も戦つたことないだらう。」

「しかし、能力だけに頼つたら技術や能力がいつまでたっても進化しないじやう。じやからお前に頼みたいのじやよ。」

「分かったよ。親父の頼みだからな。」

「よしじやあやるか。」

「よしじやあやるか。」

そういう、なにかぶつぶつとこいつの前の風景が変わった。

「あのう、なんでそんなにやる『気満々なんですか?』

「久しぶりだからな。殺るき満々だから死んだら『めんな』」

「もう死んでるからいいです。」

「よし、よく言つた! やはりお前は面白い!」

そう言つて、手を前に出す。そうすると手に槍のよつた棒状のものが出てくる。

「やるしかないのか…」

そつ言い俺も貰つた小太刀と木刀を構える。想像していたものと同じように右に木刀、左に小太刀を構える。想像と同じならば効果も能力もほぼ同じだらう。

「では、はじめるぞ。はじめて!」

「先手必勝!」

そういうおっさんがあつ込んでくる。うん、怖ええよ。笑いながら槍を前に突き出しつつ、フンッとかセイツとか乱れ突きやなぎ払いをしてくる。そのたび俺は、オウとかヤベとかいいつつ防戦一方だ。

「どうした? 攻めないと勝てないぞ?」

「へへへ…やつてやへりあー

木刀を戻し太刀にする。そのまま太刀を振るつ。軽い、これなういける！

「おおおおおおおおー！」

キインと高い鉄同士がぶつかる音がする。能力がそのまま使えるのなら！

「いけッ」

「む。」

俺が出したのはたくさんんの剣。これならかわせない！

「甘いな。」

そういうわれると俺は倒れていた。

「能力は強いがまだお前は強くないな。」

そういうわれると、急に眠くなつてきました。

第六話 誰もが通る黒歴史 後編（後書き）

戦闘描写が難しい

第七話 能力の把握（前書き）

あけましておめでとうございます

第七話 能力の把握

「でも、お前は自分の能力と武器をどれぐらい知っているんだ？」

「思い出せるのは、武器はほぼすべてだけど最高神が三つだけで頑張つてといわれたのでこれだけですかね。能力は大体分かれます。」

「じゃあ、武器の名前は？」

「魔王の太刀と魔王の小太刀ってなに笑つてるんですか。」

「厨」「N。妄想」「www」

「ひでえでかキャラ壊れでませんか？」

「これが素の俺だよ。あんな堅苦しいものいつまでも続けられるかってんだよ。」

「ですよね。」

「その木刀は？」

「暁でしたかね？」

「なぜ暁なんだよ。」

「某ボディーガードのゲームがあつてそこからとりました。」

「効果といつか能力は？」

「太刀は何でも切れる。小太刀は何でも防げる。木刀は折れないし、鉄でも切れるというより太刀と小太刀の効果を半分ずつだつた気がします。」

「やはり妄想だな。お前矛盾といつ言葉を知つてゐるか？」

「それぐらい知つてますよ。そもそも太刀と小太刀の切れ味や能力は思いの力で変わるんですよ。攻めるときは太刀のほうが上になります。守るうとすると小太刀が上になります。」

「で他にはまだあるのか？」

「ありますよ。どちらかといつと希少技能？と呼ばれるものになるといつてましたけど。」

「でそれはなんだ。」

「魔王の鎧とローデクラウンですね。」

「なんで魔王なんだよ。もつとほかにあるだらう。」

「魔王って強くてかつこいいじゃないですか。自分の信念の元に戦うとか。」

「すまんが、理解できない。で効果は？」

「ほほチートのすべての攻撃を跳ね返すと鶴の一聲といつより催眠や暗示に近いものだと思いますよ。」

「すべての攻撃を跳ね返すとか小太刀いらないじゃないかよ。」

「鎧は基本見えないし、常時展開ともできないから仕方がないよ。」

「そっちの王冠もどいだろ？ 暗示とか催眠とか使えれば簡単に勝てるじゃないか。」

「使うときは限定されるから大丈夫だし、使おうとか思わないよ。ただの飾り。」

「そりゃか。ならいいんだ。他は何があるんだ？」

「よくあるものばかりですよ。超回復とか瞬間回復とか。でも基本は創造力“想像や妄想、空想を現実に創造する”といつシンブルな能力ですよ。」

「そ…そりゃやっぱりチートだな。」

「仕方ありませんよ。思い出したくない過去を思い出さないと死ぬかもしれないんですから。」

「他の転生者…か。」

「ええそりです。」

「だが俺の親父だけでなく、他の神もミスで転生させているからな。『え、でも同じ世界じゃなくて平行世界に送ればいいんじゃ。』そろは行かないんだよ。同じところに行かせてどうかわるのかを見るために送るのだから。」

「迷惑な話ですね。」

「もうだな。」

「じゃ、帰ります。」

「どうやって帰るんだよ。戻してやらなーぞ。」

「大丈夫です。これがあれば。」

「太刀がどうしたんだ?」

「まあ見ててくださいよつと。」

「これは…空間を切つたのか?やはりチートというか規格外だな。」

「そりゃもつ妄想の産物ですから。じゃ帰ります。」

「気をつけろよ。」

「分かりました。」

そういう俺は元の場所に帰つた…どうやら俺以外の人にはこれらの道具は見えないらしい。

第七話 能力の把握（後書き）

これらは実際に黒歴史ノートとよく言われるものに書いてあります。それでも地の文を書かないほうが楽とか…

武器 能力紹介（前書き）

どうしてこうなった

武器 能力紹介

武器

魔王の太刀

能力 何でも切れる。たとえ空間だらうとドアだらうと結界だらうと魔法だらうと切れる。ただし思いが弱いと能力もそれに応じて弱くなる。しかし弱くなつても強い。

魔王の小太刀

能力 如何なる物からも守る。というよりも太刀と相反するもの。やはりこちらも思いが弱いと守りが弱くなる。しかし弱くても強い。

木刀 暁

能力 御神木から作られた木刀。太刀と小太刀の能力を半分ずつ使えるようなもの。ただし、思いで労力は変わらないし空間も切れない、守る範囲も狭い。しかし、折れないし切れ味も落ちない。

希少技能 レアスキル

創造力

能力 想像つまり頭で考えたことを現実に持つてこれる。しかし魔力が必要なのでこのままだと使えない。使えば圧倒的強さを誇る。

魔王の鎧

能力 すべてを反射させる鎧というよりもバリアのほうが近い。範囲は魔力によつて変わるのでこれも中々使いにくい。普段は自分の周りのみ展開している。効果的にはドラ○Hで言うアタックカンタ、マホカンタ、吐息返しなど。

ロードクラウン

能力 別名 魔王の王冠と呼ばれるもの鶴の一聲ならぬ魔王の一聲。暗示や催眠効果を持つ。しかし、これも魔力がなくては使えない。だが、使つことはない。主人公曰くただの飾り。

瞬間回復・超回復

能力 これさえあれば普通の傷ならすぐ治る。なぜデメリットがないかというと原因不明の病だったためそれらをなくしたいという願いがあつたため。

武器 能力紹介（後書き）

いつのまにか最強設定に…まあでもデメリットや欠点もありますからね。

設定がかぶっていたら申し訳ない。

第八話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 1（前書き）

この話は書きたかった。でもうまく書けるか不安。ここからオリジナルの設定がすこしづつあります

気づいたらもう五歳になっていた。毎日武器や能力を少しづつ使い、技術や能力などを使いこなせるようになつたが魔力関係は使えない。まあ、太刀と小太刀それに木刀にも魔力はあるからそれから供給してもらえばいいことだし。

「よし、今日も終わりだな。だけど見た目が変わらないし、筋肉がついたようにもおもえないんだよな。」

そう、最高神から能力を貰つたあと毎日親が起きない時間。深夜から夜明けの時間ぐらいまで練習している。魔力がないから魔法が使えないけど結界は使えるとかおかしいこともあつた。その前に、レアスキルが何故こんなにあるのかと疑問に思った。最高神がいうには「生き残るためにあるのかと疑問に思った。最高神がいう」と言われた。その後「おそらく“創造力”が一番のレアスキルなのだろうから管理局には気をつけるんじゃぞ。」とも言われた。

「今日は“サルでも分かる魔法のいろは”初級から上級まで”でもやるか。」

自分の小太刀とレアスキルで創つた結界の中で毎回試しているが、魔力がない魔法として出てくるため魔法ではない物が出てくる。最高神の息子が言つには「“創造力”が働いているから、魔法の形だけ出てくるんじゃないか。」との事

「もう時間か…仕方ない。」

とりあえずもう五歳だ。大事なことだから二回言つた。もう幼稚園

の中はカオスになつてゐる。転生者と思われる人たちがうじゅうじやといつてゐるのだ。大体が年中組の中にいる。他の年長や年少にもいる。もつみんな転生者は自分の能力をオン・オフで切り替えずにひたすらオンなのだから笑うと悲鳴に似た叫び、女子の頭撫でると顔を赤らめる。ああ、鬱だ。そんな中俺は部屋の隅っこに行き体育座りで、最高神の息子さんのオリと話す。名前は念話と一緒に教えてくれた。魔力がないため三つの武具はいつも常備している。軽いからそんなに気にならないし、邪魔にならない。最高神の優しい心遣いだとか。

『ああ、もつやだ。この幼稚園』

『そんな事いうならやめればいいじゃないか』

『やつはいかないからやなんだろ』

『それもやつだな』

『ああ鬱だ』

『頑張れよ。俺仕事だから』

『りょーかい』

といふな感じに親しくなつたのだ。いいやつだよなあオリつて。愚痴に付を合つてくれるし、仕事もできて強いとかありえない。

とまあ、こんな感じで幼稚園の一日常が過ぎてこぐ。授業とかできなによ、だつて授業にならないし。

～ある日の日曜日～

「今日は遠くに行こう。」

「どこに行くの。」

「三とか海、自然あふれる場所だぞ。ほら準備して来い。」

「分かった。」

「つあえず、三つとも持つてこい。家においておへと不安だし。
とこうより気づいたら近くにあるもんなん。」

といふ変わって車の中

「幼稚園は楽しいか。」

「楽しくないよ。だって、みんな恐いから……」

「そんな恐いのか。」

「みんな日が恐いんだよ。男も女も……」

「そうか……」

ああ、話が続かない……もつ寝よつか。

第八話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 1（後書き）

タイトルの意味は後々出していきます。

番外 明けましてつて昨日だろ（前書き）

注意 この作品は外伝のようなものです
そしてこれは作者の愚痴です。
さらによく分かつてません。番号をぶつた切りました。
楽しい気分を失いたくない方は見ないほうがいいかもしれません。

番外 明けましておめでたす

あらすじ

作者がぐれました。

「おこ、」のあらすじってなんだよ。」

「聞いてくれるか？」

「なんドリに面る？そしてドリは何処だ。今は家族と自然あふれる場所に行くとドリだつただうつ。」

「聞いてくれるのか？」

「何」の無限ループ。オリ助けて…」

「聞いてくれるのか！」

「いや聞かないし。」

「あのな。これは昨日書きたかったんだ。だけどもお正月だからって調子に乗ったのが悪かった。

家に帰つてあこの気分で書いつと書いたら「あれ、部屋の様子がおかしい」と思つたら…・・・」

「おこどりした。」

「まさかのフィルタリングだよ…まあモペー」やうと思つたら、不適切サイトだし。このサイと開いつと書いたら、このサイトも不

適切だし・・・

「わざわざと続きを言へよ。」

「で、親が勝手に俺のパソコンをいじり、保護の何かを入れたときにフィルタリングを掛けたらしい。

でもさ。保護もフィルタリングも必要だけども！だけじゃ一急にできなくなるとか！」

「お・・・お・・・」

「昨日はいつもなら起きている深夜に寝ていたんだ・・・でも現実は甘くなかった。

まさかの朝。誰も居ない！チャンスだ！と言わんばかりにパソコンのフィルタリングをどうにかしようと思つた。

だが何もできなかつた・・・

以前弟がフィルタリングを解除したときのように頑張つたさ。でもできなかつた。

で、俺が物に当たるのは悪いと思いながら色々殴つたり蹴つたりしたさ。でもそれもいけなかつた。」

「まさか・・・・・」

「殴つたら手から血出でくるわ、間接のところの皮剥けるわ、決め付けは蹴つたときには足の右中指がポキッと右がわに曲がるし爪はぼろぼろになつてし足の先の肉は抉れて真っ赤だし絆創膏もはるとすぐに血がにじんで意味がなくなるし、泣こうと思つたらなに馬鹿やつてるんだと思つたら笑いがともらなくなるし・・・・・・」

「なんだよ。明らかにお前が悪いだろ。」

「せう思ひにが、不眞寝したらもうこんな時間だし。朝の5時におきて馬鹿騒ぎして寝たらもう1~2時間たつてるし。」

「じゃあ何でできてるんだよ。見れないはずだわ。」

「弟が朝の馬鹿騒ぎを聞いて親に言つたらしく。で、パソコン付けて「何故できる・・・」と呴きながら書いているわけ。」

「そうかならもうこいだら。帰れ。」

「そうだね。もつ書き溜めて予約してあるし、一月の最後まで予約あるから・・・」

「勉強じりよ。」

「面倒。そしてやる気なし。これから「ペー」「な」と「ペー――――」なことがお前に起るからな。」

「だが、この作品見てる人がいると思つか?お気に入りはちりまつりあるが、駄文だし、感想なし・・・」

「いいんだよ。これは作者の妄想の垂れ流しで、糞な文なんだ。それにお前はもともと違う想像のキャラだつたんだ。」

「なん・・・だと・・・」

「もともと開示していない作品で書いていたのを。だが友達が「りりなつて面白いぜ」っていうからだつたらと思って書いた。寧ろ断片的なことしか知らないから原作ブレイクだからな。」

「わざわざこんなことを書つたなよ。アホか。」

「アホでもここの中。『』でも蟲でもここ……」

「なんてマイナス思考。」

「そんなことはおことこ出版さんこの作品『魔法少女リリカルなのは』って何?』を見ていいただきありがとうございます。」

この先も続いていくと思うのでもこんな糞みたいな作品を見ていただいているだけで嬉しいです。

では皆さん、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひいたします。」

「でも普通昨日だよな。明けましておめでとう昨日だ。」

「うぬぬ……」

番外 明けましてつて昨日だら（後書き）

はい。最後まで作者の愚痴を見ていただきありがとうございました。
今回出でたのは、主人公と私、平民でござります。
対話は地の文より楽！これだけは言える！
皆さんにとって今年がいい年でありますように。
新年早々に私みたいに怪我しちゃ駄目ですよ。

第九話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 2（前書き）

タイトルが悪い意味で詐欺になりそう。

この話はいやな気分になるかもしませんので、新年早くからのいい気分をなくしたくない方は見ないでください。

しかしこの駄文の妄想の垂れ流しを呼んでいる人はいるのだろうか

⋮

そこは自然に囲まれた場所だった。周りを見れば木々がたくさんある場所だった。

「さて山登りでもしながら自然を眺めるか。」

「ええそ'うね。」

親の話を聞くには山を登るらしい。たまにはリフレッシュもあるかな。

「山登り中」

「お父さんだらしないよ。もつと早く行こうよ。」

「ちょ… ちょっと待ってくれ。」

父が息切れをしながら登つてくる。俺？俺は修行しているからこれぐらいじゃ息は上がらんよ。母は俺と同じくらいに登つてくる。息切れしている父とはまったく正反対で疲れが見えない。

「あなた、運動不足なんじゃないの。」

「何故そんなに余裕なんだよ。」

「取引先に行くときは自分の足で行くのが基本ですか？」

「ああそつかい。」

～せりて云々

「や…そろそろ戻りませんか？」

「あい。どうしてかしら？」

うわ、今すゞいい笑顔で言い放ったよ。父はすゞ悲しい顔して
るし、じつ…捨てられている犬みたいな懇願しているような顔。

「いいでしょ。」

「あつがどうぞります。母上様。」

母から許可が下りた瞬間、いい笑顔になつたよ。わつわとせりへ
違う。

「じゃあ帰るぞ。」

「分かつた。」

そのときだつた。何かの視線を感じる。品定めをしてくるやつな、
ねつとりとした感じだ。父と母には向けられていない。どうやら俺
だけのようだ。これが思春期特有の被害妄想というやつか…いやそ
んなはずはない。まだ続いている。ヤバイこれはヤバイ。全身から
嫌な汗が吹き出る。

「どうしたの？顔色悪いわよ？」

「な…なんでもないよ。」

母に強がりを叫ぶ。恐い、怖い、このよつた状態を恐怖といつのだ

ろうか。その前に一刻も早くこの山から抜け出したい。キモチワルイ視線から抜け出するために。

（下山中）

気づくと嫌な視線は消えていた。しかしそう鳥肌は收まらなかつた。あの視線は何だつたのだろうか…思い出すと怖くなつてきた。早く帰ろう。うんそれがいい。

（帰り道 車の中）

「ああ、久しぶりに疲れたなあ。早く帰つて寝たいよ。」

「その前に夕食を作つて寝てくださいね。」

「善処します。」

そんな毎日のようなやり取りをしていた。やはつこいつ毎日が変わらないことって素晴らしいことなんだよな。非日常よりも日常だよ。身を守る能力があつても使わないように生きて生きたいよな。

でも、そんな小さく小さい願いでも世界は無常に引き裂いてくる。

… そう俺が急に死んだよ！」

帰り道俺と両親が乗っている車にトラックが突っ込んできた。これを機に俺の人生は大きく歪み、それに応じて俺の生活も何もかもが変わってしまった。

第九話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 2（後書き）

タイトルの言葉は作者が好きな言葉です。そして、どうしてこうなつた。

第十話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 3（前書き）

この話も嫌な気分になります。注意しましたからね。ああ鬱だ…

第十話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 3

トラックが突っ込んできた。そのときのことはよく覚えている。父が思い切りブレークを踏みキキーッといつ耳に残るような高くうるさい音。母が俺を抱きしめてくれたこと。トラックの光がまぶしかったこと。あげればきりがないようなことがたくさんある。しかしこの後の光景を俺は忘れないだろう。

なぜならば…

鼻につくようなガソリンのきついにおい、その中にある血のむせ返るようなにおい、母が俺をかばうようにして…長い鉄の棒のようなものに刺さっていること。そして他の鉄の棒が俺の胸に突き刺さっていることを確認したときの言葉にできないほどの後悔や悲しみに包まれている顔…そして、真っ赤に燃える炎の中で父がミラー越しにこちらを見て母と同じような顔をしていたことを…・・・・・

結果から言えば俺だけ助かつた。

理由は簡単、レアスキルの回復系統だ。超回復で傷の進行及び血の

失血を抑えつつ、瞬間回復で細胞の死を回復していったことだ。さらに入人が死ぬときや生命の危機になると生存本能が働くため、いつもよりも回復が早かつた。

医師が言うには絶対に死ぬ傷だったのに生きており、回復も早い。とのこと、しかし俺を待っていたのは人の嫌な部分であつた。

数日後俺は無事に退院した。お金は口座から引き落としてくれと頼んだ。だが俺を待っていたのは「ミミを見るような冷たい目」をしている父の弟と母の姉だった…

そこからが大変だった。葬式をやるために準備、それによる遺産の手続き、俺を引き取るかといったことだ。しかしこの内容はひどく嫌なものだった…

「どうするんだよー」この子供…」いつがいると遺産が貰えないじゃないか！」

「大丈夫よ。こんな子供言いくるめれば大丈夫でしょう。」

そう言い父の弟とその妻がしゃべっていた。キモチワルイ。なんで自分の身内が死んだのに、金の話をしているんだ。また、母の姉も「あなた！子供が残ってるじゃないのー死んだはずじゃないのー！」

「知るかよー俺が聞いたら死ぬような大怪我で助からないといわれ

たんだからー」

「なんなのよそれ…人じゃなくて化け物じゃないの…」

「だが、引き取らないと遺産は第一の身内のあの子供にはいるんだぞ。」

「だったら、わざと引き取つて施設にでもいれればいいじゃないのよ。」

と聞こえた。この人たちもキモチワルイ。どうしてこんなことを本人がいる前でいえるんだよ。子供だから分からないうことか。だが、あいにくと中身は子供じやないんでね。

「おい。どうする」の化け物は。誰が引き取るんだよ。」

そう父の弟が言つと、俺の知らない親戚の人気が集まり話し始めた。

「まず、遺産は第一相続者のあの化け物に入る。だから、引き取るのは慎重にしないと。」

「お金は欲しいけど…あんな人じゃない奴誰が引き取るのよ。」

「まつたく、嫌なものまで残していきましたねえ。」

「まつたくだ。」

「じゃあさ。言こぐるめて遺産をあいつ以外の遺族で分けようぜ。」

そう言い終わると母の姉がこちらに来た

「ね～え。僕、両親が死んでつらいのは分かるけれども、遺産つて言つものがあつてね。それを分けたいんだけども。あなた要らないわよねーはい決定！」

と一方的に言つられて親戚が集まるところでは、やつたなとか、これで生活が楽になつた。とか詩文の都合のいいなりじゅべつしている。

ああつるさー。ナンデソンナンタノシソウンシャベツテイルノ？オカシイジャナイカ。ミウチガナクナツタノー…

「う・・ぬあ・・・い」

もうなにがなんだかわからない。もうこやだ。こんなとこり一刻も早く抜け出したい。しかし

「やうだよーあいつを施設に入れるんぢゃなくて生物研究の被験者モルモットにすればいいんぢゃないか。やうすればかなりの金もはいるぞ。」

「ビ」に入るのよ。」

「薬の被験者や、実験の対象になるところにけばいいんぢゃないか？それにあんな事件なのに生きていのだから有名だる。」

「それもやうね。」

ああもうだめだ。頭が割れるよつにイタイ。前世の体が動かなくなつた時と比にならない位に…

「うるさいんだよー……金がそんなに欲しいならくれてやる……」

だからもう、俺の目の前に一度と現れんじゃねえ！……「

そう親戚どもに言い放った。いやもう親戚でもなんでもないか。た
だの他人。遺産はその手切れ金だと思わせればいい。そう思いなが
ら、公衆電話へ駆け込んだ。

第十話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 3（後書き）

この話をよんでも気分が悪くなつたりした方がいましたら「めんなさい」。

そしてこれは妄想の垂れ流しです。軽く流す感じでお願いします。

書いているとき毎ドラみてたからか…

第十一話 絶望 懲悪 裏切り 憤怒 4（前書き）

やうじてひなつた。そして、原作までいかないといつ。

第十一話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 4

公衆電話に向かつた俺は神への電話をする。

「なんじや。今いとこ何じやが…」「いいから、願い事を言ひ。なんじやよ。そんなに怒つて…一回リラックスじやよ。深呼吸、深呼吸。」

そう言われたので深呼吸をする。すー。はー。よし

「で願いなんだが。」

「その前になんで、そんなに怒つているのかが分からん。理由を説明してみるがいい。」

「簡単に言つと、両親が亡くなつた。それで、その親戚たちが嫌になつた。それだけだ。」

「なるほどのう。人の嫌な部分を見たところとか。」

「ああ、そして願いだが…“親戚から俺の記憶を消してくれ”」

「またなんでそんなものを…お主を知つている人がいなくなるんじやぞ?」

「別にかまわない。家に無断で侵入されるよつましだ。」

「それもそつじやな。まあ、わしもわしの息子もお主を知つているからだ。」

「せうこつじくれると助かる。」

「ふむ。では行くぞ……終わつじや。そして話を聞くために
じひりに来てもらひつからな。」

そうこわれると、俺は光に包まれた……

「で、なぜじうなつたか。詳しへ教えてもらひつかのお。」

そうこわれたので最高神とオリの前で「これまでのこと」を話した。山
に行つたことから事故にあつたことまでを……

「大体分かつたんじやが、その親戚は今どくなつてこるんじや?」

「まあ待つてろよ。親父、お、これだこれ。」

そつ言われて見たのはさつきの景色、俺が出たときと何も変わらない。いや、変わつてゐるのは俺がいなくなつたことにより誰が相続
するかと聞つてゐる。

「なんともまあ……汚いのあ。」

「これが珍しいほつですよ。おれいくかなり遺産があるんだわつ。
なあ坊主。」

「誰が坊主だよ。確かに働いているのに最低限のものしかなかつた

「気がします。」

「む。何故そんなに他人事なんじゃ？なあオリよ。」

「それは俺も気になるな。」

「簡単なことですよ。ロードクラウンで自分に暗示をかけたんですよ。」

「あれはかぞりじゃないのか？」

「自分にかけるくらいなら簡単ですよ。だって俺は化け物ですから。」

「

「なあ、おぬす」「あんまり思いつめるなよ。坊主はいつまでも坊主なんだから。復讐や自棄になるなよ。困つたら俺にいつでも念話していいからな。」「ちょ、わしが言いたいことをつてか何でオリと念話できる？」「ありがとう。オリ。」しかも呼び捨て！？何でこんなに親しいの？何？わしつて空氣なの？」「

いじけてしまつた最高神を慰めるため時間がかかつた。そして、最高神の名前オリエアと念話を教えてもらつた。自分名前を息子に教えるとか…と思つた。

第十一話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 4（後書き）

何故こうも悲しい事があるのが主人公だろうか…
しかしこれは、もし最高神のオリエアが主人公に能力をやらなければこんなことにならなかつた。

その前に、主人公が消えたくないといわずにそのまま消えてしまつたら。などとあげればきりのないような事です。簡単に言つと、欲張つたからこうなつたんだと思います。

第十一話 絶望 憎悪 裏切り 憤怒 5（前書き）

そろそろ原作入りしたいなと思つ。今日この日
そして今日テレ東でStrikersが放送される…原作行きたい
よ

オリとオリエアの好意？厚意？でお金の心配はないらしい。しかし、新聞を見せてもらひたとき驚いた

「居眠りでの事故！…トラック激突で一家死亡」と書かれていた。

「なぜ、俺は死んだことになつてゐるんだ。それに相手は一切悪くないとか。」

「簡単なことじやよ。死亡届をあいつらが出したからじや。まあその死亡届もなかつた」とになつてゐるがのう。」

「まあ、思いつきり心臓を一刺しですからね。仕方ないといえば仕方ないでしょ。それに能力がほんとにチートじやないすか。死んだ人が生きてゐるとか。」

「そこが最高神クオリティじやよ。願いをひとつ間違いなく反映させる、これがわしの最高神パワーじやよ。」

「クオリティかパワーかどちらかにしろよ。」

「じゃ、クオリティで。」

「ああ、そろそろ帰るわ。じゃあね、また今度。」

「つむ。じゃあ送つてや」「よつと、じゃね。」なんで…?」

「あいつの太刀は何でも切れんやしこや? 向こうからもう一振りに来れるようだし。」

「なんて物をわしは創つて渡したんじや……」

「後悔しても遅いぞ。坊主は能力も武器も使いこなせるよいになつていたからな。」

「こくらか早いんじや……」

「もともとあいつの妄想とか想像だろ。だから使い方も知つているんだろ。」

「そうじやのつ。まああいつの世界は元はアニメじやが、もつ崩壊は始まつていいからのつ。」

「そつちの方が大変だろつ。」

「まあ、これも楽しみじやから仕方あるまい。それに、あそこをただの一次元だと思つていい奴らより、現実を見ているあいつの方が楽しいし。」

「それもそうだな。」

「血や~

「さてと、どうしたものか。氣づいたらもう、来年小学校だからな

あ。」

そう、ここで運命が決まるのだ。私立聖祥大学付属小学校に行くか。それとも別のところに行くかだ。だが、親は私立のエスカレーターの方がいいとか行ってたしな。ということは、あの遺産は俺の学費？…あ、なみだてきた。ヤバイ、マジ泣きそう。

「しばらくお待ちください」

よし、落ち着いた。まあ紹介文見みたいなのに共学と書いてあった。まあオリエアが行っていた崩壊が始まっているんだろうから。仕方がない。とりあえず疲れた。もつ寝よつ。

こうして俺の人生が変わった出来事が終わった。

俺は…

普通の毎日がいとも簡単に消えることに“絶望”し

簡単に日常が消えてしまうことに“憎悪”し

手のひらを返すように消えていくことに“裏切り”を感じ

自分自身の行動や身勝手で消えることに“憤怒”を感じた

結局、これらも自分勝手なことなのだから仕方ないといえばそれで終わりなのだろう。

第十一話 絶望 懲懟 裏切り 憤怒 5（後書き）

ひとつ原作と違つたことが出てきました。そして一区切りが終つました。

これで原作に進める。

第十二話 代償（前書き）

とうあえず投稿

注この作品は妄想の垂れ流しです。
だから細かいことは気にしないでください。

第十二話 代償

全てのものに代償がある。

それは、物を買つときにお金を払つよう。

それは、浮氣をした後の離婚だつたり。

それは、大きな力を手に入れた事ですべてのものが大きく変わつた
り。

あげればきりのないような事だ。

「おい。化け物が来たぞ。」

この言葉を聞いたのは何回だらつか?百回?十回?いやもつともく
だらつ。

何故こう呼ばれるのか。理由は

事故で死ぬような怪我で生き残つたからだ。

どうやら、園のまつには死んだという情報が流れたようだ。だから化け物と呼ばれるんだろう。

これは、仕方がない…

だが、命を狙われるのは別件だろう。

あんな新聞にも載るようなことだつたし死亡と扱われていたことから転生者と思われる方から攻撃を受けていた。

まあ、とても弱いものばかりだからな。オリよりも弱い。というより能力のみに頼つてゐるし、同じ能力の人もたくさん来ている。そもそも固有結界とか心象風景を現実に出すものだろう。だから、使つた奴らは驚いていた。

だつて、何もない場所なんだぜ。ひとつのももないただ広いだけの空間。使つた奴らはなぜ無限の剣製じやないんだ。とか言つてたかな？

まあ人の噂も七十五日と言われるものだし。まあ無視だな。とこのような毎日を繰り返していた。

幼稚園に行き、家に帰り、ご飯作つて、転生者が来たら撃退して、寝る。

この毎日を繰り返す。まあオリとオリエアとの会話は楽しいからいいけれども。

ある日森に行つた。

とりあえず毎日の日課になつてしまつてゐる練習をする。

え？ 戦闘狂じやないですよ？

イヤイヤ、本当に。戦うのも嫌だし痛いのも嫌なんで渋々やつているだけですしお。

できるなら、戦わずに生活出来たらと思いますも。

「封血結界七重式」

とまあ毎回このよつたな結界を張る。

封時結界と変わらないが違うところは魔力を使わないところか。魔力の代わりに名の通り血を使っている。七重なのは、一枚だとすぐ壊れるからだ。七重ぐらいがちょうどいい。名が痛いのは仕方ない。

「今日もぼちぼち頑張りますかね。」

そう言い、太刀と小太刀を構える。相手はオリと瓜二つの人形だ。簡単に言うと自分に暗示をかけて見えるようにしている。痛覚などの感覚もリンクしているから現実的に戦える。

太刀を思いっきり振ると空間¹⁰と引き裂く。やっぱりありえない能力だなあと思いつつ戦う。

幻覚なので絶対に倒れない。やっぱり新技使おうかな。と考えているが技が思いつかない。

そんなことを考えていると攻撃を食らう。その瞬間俺は意識が落ちた。

気づくとそこには大きな自然に囲まれた森だった・・・・
はい。気絶していただけです。結界も壊れてないし一人で新技でも開発しようかな。

創造力で出来ぬもの無し！――

といったが中々うまくいかないんだなこれが。まあ太刀一振りであ

たれば一撃で基本沈むからいいかな。そんな事思つていた時俺にもありました。

でも新技だよ？カツコい技でも地味な技でもいいからバリエーションを増やしたいんだよ。

何で振り回しているだけで相手が引き裂かれるんだよ。もつと業が欲しいよ。

と考えて、いとこにある茂みが揺れた。

ビクッと肩どころか全身で表現した俺は悪くない。だつてここは結界の中だ。出て行くことは出来ても入つてくることは不可能なんだから

「アハハ。ジヨーダンキツイデース。」

なぜかこう喋ることしか出来なかつた。まだがさがさと揺れている。これはポケットなモンスター見たいなエンカウントか、それとも竜の探求みたいなエンカウントか。

前者なら捕まえるか逃げればいい。

だが後者の場合は戦うしかない。俺はモンスター・マスターでも魔物使いでもないからな。

とつあえず覗いて見よ。そう結論を熱い脳内会議の末出した。

「逃げちやだめだよなあ。」

そう呟き覗く。テレテレとエンカウントの音が聞こえるかと思つたら聞こえなかつた。

いたのは狐。怪我をしている。

まあ治してやるか。そう思い怪我を治してあげた。

第十二話 代償（後書き）

竜の探求、ポケットなモンスターわかりますよね？
狐は作者の好きな動物です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7367z/>

魔法少女リリカルなのはって何？

2012年1月5日21時09分発行